風土・文化の伝承の場としての里山

Satoyama: The Field of Nature and Culture's Taste

北尾 邦伸*

Kuninobu KITAO

1. 里山的自然とわれわれ

土を踏む 風に聞く 声と出会う そして
はるかな時を見る …

これはテレビで連続放映されている『街道をゆく』の、出だしのナレーションである。司馬遼太郎が現地を訪れてしっかりと土を踏み、風を全身に満たして語り出すと、なんでもなかった風景が突然、生き生きと躍動をはじめる。

里山では、その土を耕し、農的営みを続けている人びとが生活をしている。

人間社会をとりまく環境的自然に「主体性」を働かせ、同時に相手から「環境性」としての作用を受ける。これらやりとりのなかで結合され、全体として用をなす様式を、川喜田二郎は「文化」とよんでいる¹⁾。

大地を含めた風土としての文化。文化はもともと風土そのものだといってよいのかも知れない。そして里山は、日本における「風土としての文化の場」²⁾そのものである。

ところで、「時を見る」とはなにか。岩田慶治によると、伝統社会の人びとは「時」を手で触れることのできる<もの>として、観念していたという。tangibleな姿としての「時」は、当然眼で見ることができる。「時間」は「時のま」としての「余白」であった³⁾。

近代科学を越えようとする岩田は、文化のおかれた場をとらえるには、身体をとうして対象に接近し、観察者は「参与者」とならねばならないと述べている。参与するとは、死を含む場に歩み入るということである。このことなしに文化的支柱をその上に建立している<隠れた自然>を「見る」ことはできないという。彼によると「文化」が、形式をもった生きものであるのに対し、「場」は形をもたぬ生きものである³⁾。

現実の里山社会が、このような伝統社会のなかにあるとは、いい難い。しかし、このような「はるかな時」を伝承している、とみなすことも不可能ではない。

この点はさておき、もう少し見える次元で、いま、里山でなにが問題になっているのかを示しておこう。

「風景」が、主観的なものと切り結ぶ映像であるとするれば、「景観」はより客観的で、かつ、広がり構造をもった視覚的なものと考えることができる。この「景観」の手法を村落史研究にとり入れたのは、福田アジオであるが、彼は、ムラ（集落）、ノラ（耕地）、ヤマ（林野）の領域形成論として村落史をおさえようと試みている⁴⁾。現在、この景観に現れたムラ・ノラ・ヤマの一体性は切り裂かれ、見る人をして、風景が衰退したと感じさせている。

「生きられる景観」という概念は樋口忠彦のものだが、これは場所あるいは土地にかくされた固有の特性を発見し、それを創造的に人間生活に組み入れることにより成立させてきた「好ましい棲息地」、の景観である⁵⁾。いま、里山社会は、この環境形成力を著しく減退させている。

ところで私も所属している里山研究会では、里山林としての里山だけでなく、それに隣接する水田や畦道や畑や茅場、そしてため池や用水路を含めた景観を里山とよんでいる。この里山的自然の一体性は、景観生態学によって明かにされつつあるが⁶⁾、かつての農的営みが崩れ、多様な生きものにとってのすみかが分断され、喪失が進んでいる。多くの昆虫や植物が生存の危機におちいつている。

私は、昔の里山的世界に回帰しようとしているのではない。衰退しつつも貫きとうしているものを発見し、今日的な意味を付与して回復・修景を図りたく思っているのである。それにしても、それを誰が担うのか。われわれはどのようにして参加ないし参与をしえるのか。

2. 里山の世界

かつての里山の世界には、「農的営み」としかいいようのない（市場に対応しての発展をめざす「農業」のイメージと区別される）生業を担う農民がいて、水や山の管理主体としてのムラがあった。彼ら農民は、米づくりや食料生産ではなく、田をつくるノラ仕事に、もっといえば、「田をこしらえる」ことに従事していたのである²⁾。

ヤマからは、彼らの生業の一環として、肥料用の草や山

*島根大学生物資源科学部

菜、そして、薪炭材や農用資材が採取されていた。薪炭林は、クヌギやコナラなどの萌芽更新しやすい樹木で構成されていて、伐ったあとは天然の回復力、自然の循環の時間を「待つ」というやり方で営まれていた。

太陽は西に沈んで一度死に、また東から再生してくるものであり、地上の諸々の生命力は冬に向かって衰え、また春にその力を吹き返してくるものであった。自然のリズムがあり、循環があり、そして、田んぼに対しては、この世界を確かなものにする「労働」の「蓄積」があった。すべての生きものが、大地とのつながりで生きていた。自然との一体感のなかで収穫を喜び、軒先に薪を積み終えては、これで冬を越せると家族して安堵したことであろう。

ムラ・ノラ・ヤマ、そして互いが互いに見える範囲が村落である。村落の外部にオクヤマとハラがあり、そこは「無縁」のものが棲む場所であった。しかし、その無縁のものと村落の間にも興味深い相互関係の歴史があり⁴⁾、里は同心円状の広がりをもって開かれていた。オクヤマを介してあの世ともつながり、いつもカミに見られていると感じつつ自制し、また、感謝の念も抱いていた。

ムラには祭りが欠かせないが、祭りの起こりには、折り合いをつけて自然との間での約束ごとを改めていくという契機が含まれていたとの見方²⁾は、おもしろい。万物は森の客であり、人間が一番遅れてやってきた客である。客は、客らしい振舞いをしなければならない²⁾。

共同体の息苦しさや、労働の過酷さは相当なものであったであろう。しかし、いかなる生存状態にあらうと、人は満足や楽しみをも熱望している。環境的自然への情緒的な結びつき。人間がもつ場所への愛情と愛着。イーファー・トゥアンは、これを「トポフィリア（場所への愛）」としてテーマ化している⁷⁾⁸⁾。山仕事と山遊びは表裏一体のものであり、稼ぎに追われる生活に変容した現段階においても、人びとは紅葉を愛でながら弁当を食べ、川に遊び、蜜蜂を手なづけながら生活を楽しもうとしている⁹⁾。人間の精神がのびのびと自然のなかを遊び、環境的自然への帰属＝同化²⁾の意識が貫いていることが発見できよう。

すでに触れたが、農的営みの小規模で多彩な生産のありようは、モザイク状の多様な環境的自然を形成し、この自然を利用して野生生物が生息していた。これら総体が、かつての日本の身近な自然そのものであり、「うさぎ追いしかの山」であった。里山は里山としての豊かさのなかにあったのである。いま、農業的展開のもとで里山的世界はその一体性を分断され、激しく分解している。とりわけ農地に迫る里山林は放置され、うっそうとした常緑広葉樹林と化して人を寄せつけず、農と林が切れた関係にあることをうかがわせている。近代化というフィルターをかけた眼で見ることによって、「遅れた地域」となってしまった里山で、人々も自然も苦悩しているといわざるをえない。

3. 森と里の思想

進化の限りをつくしている科学文明が状況を切り開き、現在、アングロ・アメリカン型のグローバル・スタンダードの時代を迎えている。明治以来のキャッチアップ体制（「地方のたかり中央の支配」）が崩壊にむかい、究極のところ「儲けて勝負し金で処理してどこが悪い」というオープンな社会が到来している。このグローバリゼーションの軸に対して、生活者起点ないしは地域・文化の視点からの価値軸をどのように設定していくかが問われている。

昔ながらのよさをいかに保持し伝承していくかは、ますます困難で重要な課題となっていくであろう。自由な発想からの市民参加や、種々の立場からの多様な取り組みが期待されるが、そのためにも、できることなら将来社会に対するパースペクティブを共有したいものである。

地球温暖化防止京都会議で配られていた2005年愛知万博のPR誌の2枚の写真は、いずれもが里山らしき森を写したものであった。また、掲げられていたテーマは、「Beyond Development: Rediscovering Nature's Wisdom」となっていた。前者は、「現代文明からの解放」と考えられる。後者は、「自然の叡知の再発見」であるが、意味するところは、大地の恵みへの信頼の念の回復、ではなかろうか。これらのより具体的なイメージが「森と里」ということになる。自分の方に引き込み過ぎの解釈であろうか。

与えられた標題に沿って、ここまで苦し紛れな事を書いてきたが、高木仁三郎『いま自然をどうみるか』¹⁰⁾に触発されなければ、全く筆が進まなかったであろう。

高木はこの著書を、「二つの自然」からはじめている。私たちの自然観は、科学的・理性的なものと感性的・身体的なものにと激しく引き裂かれ、人間の内なる「第一の自然」は、征服されるべき自然の側に入れられてしまっている。現在社会は合理性が強制力をもつ社会であり、そのもとで労働があり、技術がある。それでいてこの合理性（科学的・数学的秩序）は、宇宙を解明できているわけではない。これら現状と科学史を、彼は説得的に述べている。

高木は生物の共生を積極的なものとしてとらえる視点を獲得し、「生物界のつくる文化」という仮説を提出している。それは、循環によって定常状態を維持しようとする開放定常系としての生命系に関する基本的な考察に基づいている。全体として互いの生存条件を安定させるべく「成熟」をとげようとすることを、彼は<文化>とよぶ。そして生物全体の創出する<文化>の世界に、人間の文化や営みをどのように合流させていくかを最大の課題としている。また、人間の生や生活を自然の営みのなかに相対化することこそ、「人間の主体性」があると主張している。

彼のこのような主張は、大地とのかかわりのなかで文化をうちたてようとする「森と里の思想」と連続している。そして、その格好の舞台が里山となる。なお彼は、科学が

らは最大限に学ぶという柔軟な姿勢を保持している。

自然とのかかわり方で気になる岩田の説を再び紹介しておこう。彼は、「新たなアニミズム世界の創造」を提案している³⁾。彼によると、アニミズム世界は対応の論理によって貫かれている。そこでは、人と＜もの＞、＜もの＞と＜もの＞とが直接無媒介に対応する。直接無媒介に対応し対座できるその場所は、＜隠れた自然＞がその姿をあらわすところである。そこでは、＜もの＞と＜もの＞とが互いにその姿を交換する。鳥が風になり、花が石になる。その場所は、万物の変身するところである。彼は、人間の営みの、大地と一番近いところに、技術ではなくアニミズムの宗教をおこうとしているのである。現代文明社会は、技術が自然と人間の間にわけ入って決定的な力をもっている。当然にも彼は、この点を意識している。

わかりやすい話に戻すと、司馬遼太郎は「文明」を、たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なものと規定し、一方「文化」はむしろ不合理なもので、特定の集団においてのみ通用する特殊なものとおさえている。そして、現代にあって文明を生みつづける地域はアメリカ以外にないと考えて、アメリカへの旅に出ている。スプリングラーの装備で緑が維持されている現地に立って、この国では大地に人間が載っているのではなく、エネルギーの上に載っているのだと実感するくだりが紀行文にある¹⁰⁾。

4. 里山を生かす

森と里の思想は、場における実践をとうしてしか明確にならない。また、実践にこそ意味がある。

里山をどう生かすか。生かすとは、相互主体的な関係のもとでは、生かされるということと同じである。はたしてわれわれは、どのようにして里山の世界に入っていく、ないしは、つなげていくことができるのであろうか。

里山研究会が実践的課題として取り組んでいることは、里山景観をワンセットとしてとらえ、それをセットとして保全する運動である。市民農園を建設するのなら、ある幅で帯状に林縁部に設置していく、といった提案も行っている。有機農業の展開を支援していくことも当然含まれる。

他方、里山林を伐って、炭や電気としてのエネルギー源にすることにも力を注ぎ、全国2千カ所に小型の木ガスによる熱電併給センターを建設する構想ももっている。木ガス発電は大気中に炭酸ガスを排出しない発電システムとして、スウェーデンやデンマークでは国民的合意がえられ、現に炭素税が課税されていない。発電の際には確かに炭酸ガスを排出するが、それをまた森林が受け止めて吸収するから一定量が循環するだけ、と考えうるからである。

その間のロスを伴いながらも電気は遠距離に送ることができる。しかし、熱はそうはいかない。熱によって暖房も冷房も可能であり、しかも冷暖房に大量の電力が使われて

いるというのに、遠隔地に立地した巨大技術装置としての現行の発電システムは、エネルギーの6割近くを熱として無駄に捨てている。これに対して、木ガスによるコージェネは、分散型地域社会の建設にふさわしいエネルギー供給システムであり、木を伐ることによって、明確に里山林の保全にもつなげていくことができるのである。

ところで、造園家は森と里の思想の実践において、どのような役割を担えるであろうか。里山景観を保全したり修景したりする際に、おもむきを与えたり、味わい豊かなものにするとは、実に重要なことである。この議論は、「自然美とはなにか」につながっていく。この点は、「緑」や「風致」を意味深く考察している中村一に譲ろう¹²⁾。

コトとしての時を重ね、時間という「余白」の中に熟成してくる＜文化＞に造園家が合流していこうとすると、どうしてもビジネスとしての立場からの参加と自家撞着する局面が発生するであろう。この問題は、自分の問題として個々に引き受けてもらうしかない。

いろいろ述べてきたが、はるかな時を見ることに、皆さんに「主体的」に参加・参与されることを訴えたい。いや、そのような潮流はすでに多様に広範に形成され、互いに影響を与えつつある。これはひょっとすれば、これからの社会に向かう新しい文明とってよいのかも知れない。

最後に、中村一氏からの今年の年賀状を紹介しておこう。そこには、「公教育の発生が寺子屋なら、今こそ里山で遊ぶ場『里子屋』の必要性が叫ばれるべきです」とあった。

参考および引用文献

- 1) 川喜田二郎(1989): 環境と文化: 河村武・高原榮重編「環境科学Ⅱ」, 朝倉書店
- 2) 前田俊彦・高木仁三郎(1986): 森と里の思想: 七つ森書館
- 3) 岩田慶治(1993): コスモスの思想: 岩波書店
- 4) 福田アジオ(1982): 日本村落の民俗的構造: 弘文堂
- 5) 樋口忠彦(1981): 日本の景観: 春秋社
- 6) 田端英夫編著(1997): 里山の自然: 保育社
- 7) イーファー・トゥアン(1992): トポフィリア: せりか書房
- 8) 北尾邦伸(1996): 暮しを守る緑の屏風: 菅原聰編「森林 日本文化としての」: 地人書館(ここで筆者は、森をつれてハラに進出した出雲の築地松をめぐる農的営みに、トポフィリアを意識して接近した。)
- 9) 北尾邦伸(1992): 森林環境と流域社会: 雄山閣出版
- 10) 高木仁三郎(1985): いま自然をどうみるか: 白水社
- 11) 司馬遼太郎(1986): アメリカ素描: 読売新聞社
- 12) 中村一(1993): 自然美の擁護: 退官記念シンポジウム